

氏 名：栗原 栄子
学位の種類：博士（看護学）
学位記番号：乙第1号
学位授与年月日：平成23年6月21日
学位授与の要件：学位規則第4条第2項該当
論文題目：NICUに入院している早産児の母親に対する直接授乳支援プログラムによる介入とその効果
Intervention Using a Breastfeeding Support Program for Mothers with Premature Infants in NICU, and its Effects
論文審査委員：主査 山本 あい子（兵庫県立大学）
副査 片田 範子（兵庫県立大学）
副査 坂下 玲子（兵庫県立大学）

審査要旨

近年の周産期医療における母体胎児管理の改善・医療システムの整備や強化により、今まで生存できなかったより早い時期の早産児の出生割合が上昇傾向を示し、加えて新生児医療の進歩により、早産児の生存率が改善されている。その一方で、予期しない早期に児の出産を体験することとなった母親は、想像していた成熟児を得られなかったという喪失感や失敗感、生命の危機にさらされている子に対する罪責感、あるいは保育器内の子どもに対して親として何も出来ないという無力感等を体験することになる。

Family-centered care (FCC) の概念は、子どもにとって家族は不可欠な存在であり、医療者との対等なパートナーシップのもとに、家族と医療者が子どものために協同して取り組むという考え方である。しかし新生児集中治療室におけるケア提供においては、早産児の母親は児のケア提供者であると同時に、早産児の母親になっていくうえでは医療者からの支援が必要な存在であり、ケアの受け手であると認識されてきている。このような背景の中、母親にとって直接授乳が失敗体験ではなく成功体験となり、自信を持って授乳が行えるような母乳育児支援のあり方に着目し、母乳育児支援プログラムの開発ならびにその効果検証研究に取り組むに至っている。

本研究目的は、新生児集中治療室（NICU）に入院している早産時の母親が、母乳育児の体験を通して自分にできることに気づき、主体的に行動して母乳育児の成功体験を積み重ねることにより、

直接授乳の実践・継続に向けて持てる力を発揮できるような支援プログラムを作成ならびに実施・評価することである。本研究で作成された母乳育児支援プログラムは、「すべての人間が本来もっている、物事を解決したり、目標をかなえたりするために必要な力を引き出すための対話やアクションや人為的な環境作り」と定義されるコーチングの概念を基盤としている。母乳育児に関して成功体験を積み重ねることで、直接授乳量や母乳のみの回数等が増加し、母乳に対する自己効力感や児への愛着が高まり、不安は減少すると仮定されている。

本研究は、便宜的標本抽出を用いた2群比較による準実験研究であり、介入研究である。本研究で用いられた教育プログラム内容ならびに支援時期を含む方法については、予備調査を経て、母親の気づきを促し主体性をより支援するために、準備期における母親の行動目標に5つの目標を追加、また適応期では2つの目標を追加し、さらに介入回数を実行可能な週3回から2回へと変更されている。

評価指標には、搾母乳量・搾乳回数・直接授乳量・人工乳補足の有無等を含む母乳育児状況、母乳育児効力感（母乳育児効力感尺度の日本語版）、愛着ならびに子どもへの不安（産褥期母親愛着尺度日本語版）が用いられた。データ収集は、介入群は教育プログラム受講前・児退院時・児退院後1ヶ月の計3回実施し、一方対照群は初回調査・児退院時・児退院後1ヶ月の計3回実施している。

研究対象者は、在胎週数34週未満の早期産児を出産した母乳育児を希望している日本人の母親であり、カンガルーケア実施可能な健康状態にある者であった。また早産児については、先天的な異常や中枢神経系の異常がない在胎週数34週未満の単体で出生した児であり、カンガルーケアを実施している児であった。研究対象者の募集は、2カ所の総合周産期母子医療センターで行なわれ、研究参加に同意した協力者は、本支援プログラム提供をうけた介入群19名と対照群17名であった。両群には統計的に有意な違いは認められなかった。

得られた結果として、介入群の児退院時における母乳育児効力感は対照群と比べ有意に高く、母乳育児に対して自信があることが示されていた。しかし児退院後1ヶ月の時点での効力感は、介入群が対照群より高い値を示したものの、両群に有意差は認められなかった。母乳育児状況については、介入群の児の方が退院時の直接授乳量が有意に多い値を示した。また児退院後1ヶ月における介入群の母親は、対照群の母親に比べて、1日の授乳の中で、母乳を与える回数が有意に多く、逆に人工乳を与える回数は有意に少なかった。愛着については、児退院時ならびに退院後1ヶ月共に、両群に有意な差は認めなかった。子どもへの不安については、対照群の母親の方が初回調査時ならびに児退院後1ヶ月の不安が有意に高くなっていた。

本博士論文は、コーチングの考え方をを用いて母乳育児支援の枠組みと介入プログラムが作成され、母乳育児状況、母乳育児効力感、愛着ならびに子どもへの不安等を評価指標として、介入の効果検証を行なっている。その結果、児退院時および児退院後1ヶ月という測定時期によって、対照群よ

り介入群は良い値を示してはいるものの有意差は認められない項目もあるが、介入群に統計的に有意差が認められている項目も見られている。